

我れ地にて火を投ぜんとて来れり
——ルカ伝第12章49～50節——

1991年3月10日

小池辰雄

十字架と聖靈は絶対不可離 靈火 十言 火の如き福音 四位一体 キリストの十字架の碎け
火の預言者 愛の炎 靈火人

【ルカ12】

⁴⁹ 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰ されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い^{せま}逼ること如何^{いかばかり}許ぞや。⁵¹ われ地に平和を与えたんために来ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

● 十字架と聖靈は絶対不可離

ルカ伝9章51節から、キリストがエルサレムへ向かつてガリラヤを出られた、エルサレムへの旅の中の一箇所です。

⁴⁹ 我は火を地に投ぜんとて来れり。^{きた}此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

この日本語の訳は非常にいい訳です。

⁵⁰ されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い^{せま}逼ること如何^{いかばかり}許ぞや。

この一節。そして

⁵¹ われ地に平和を与えたんために来ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

非常に烈しい言葉です。水を割らずにキリストはおつしやる。いわゆる平和はみんな偽りの平和だ、本当の平和はそんなものじやないと。

「自分は火を投ずるためにやつて來た。この火が燃えたら、もう他は心配ないんだ」

と。もちろん、これは聖靈の火です。聖靈の火をキリストはいきなり燃やしたかといふと、燃やさなかつた。ということは、その後の50節に、

「されど我には受くべきバプテスマあり」



とは十字架のことです。

「十字架を通らなければ、実はこの火は投ぜられないんだ」

と。それがペントコステなんです。地上でキリストは、彼自身がもちろん火でしたけれども、それを弟子たちに伝えるわけにはいかなかつた。それは、

「贖罪という驚くべき事態を、十字架の贖罪ということを通らなければ、聖靈を降だすわけにいかない」

と。これがすごいところなんです。ある人たちは「十字架、十字架」といつて、聖靈がさっぱり出てこない。今度は反対に、聖靈を重んずると、「聖靈、聖靈」といつて、十字架がいい加減になつたら大変だ。この十字架と聖靈は絶対不可離の関係にある。十字架を通らなければ、キリストは聖靈を降ださなかつたんですから。これが、

「思いせまることいかばかりぞや」

という内容です。

「本当はすぐ与えたいが、そうはいかないんだ」と。二千年前にキリストはもう既に十字架を、贖罪を果たしておられるんだから、我々は十字架を、このキリストの現場を、その現実を本当に受けとつていかないと、聖靈も本ものにならない。今度は、聖靈を受けとらなければ、十字架も本ものにならない。ところが、一般のキリスト教界でこのことを本当に身で受けとつている者が一体幾人いるか。だから、

「本当のクリスチヤンは天才より少ない」

とキルケゴールが言つたのは非常に皮肉な言葉だけれども、非常に穿つた言葉です。そうでなければ、キリストはいきなり天界へ行つてしまつて、

「私の真似をしろ」

ということなんです。我々はキリストの真似はできない。キリストは我々に一つも水を割らずにズバリズバリと仰る。それで何が福音かと。不可能なんだ、全部。キリストの言は私たちには不可能なんだ。その不可能な言葉を与えておいて、福音だと言う。喜びのおとずれだと言う。どこが喜びのおとずれかということですね。

「幸いなるかな、靈の貧しき者、天国はその人の有なり」とは、誰が本当に靈が貧しいか。それは、

「私を受けとりなさい」

と、キリストは実力の裏付けをもつて、ものを言つてゐる。だから、実力者キリストを受けとるまでは、キリストの言葉が福音にならない。ところが、キリストを受けとらないで、キリストの言葉や行為を一生懸命で真似しようと思つて、努力精進がんばつたつて、これはくたびれるだけで、どうにもならん。それが、この

「我は火を地に投ぜんために來れり」



という烈しい言葉です。

● 霊火

ところで、この「火」というのを、創世記から默示録まで私は少し調べた。火にはいろんな種類の火があります。けれども、キリストのこの聖言に関連したような火のところを多少拾つて、これから学んでいきたいと思います。

最初は、出エジプト記3章、

「¹モーセその妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧いおりしが、その群を曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに、²エホバの使者棘の裏の火³の火⁴の中にて彼にあらわる。彼見るに棘火に燃れどもその棘焼けず」（出エ3・1）

2)

この火です。このモーセが見た火は普通の火ではなかつた。靈火、であつた。だから柴が燃えない。エホバの神が、あるいは神の使いといつていが、火⁵の中にあらわれた。「火⁶」と書いてあるが、ヘブライ語でもやはり「火⁷」といいう言い方になつていて、「火⁸」といいう字が出ている。ヘブライ語で「火⁹」といいうのは「エーシュ」という字です。

モーセが神さまに出会うが、その出会いの時に、靈火、靈的な火といいう現象において神の使いが現れる。神の使いかと思つていると、今度は、エホバの言が出てくる。

「即ち神棘の中より、モーセよモーセよと彼を呼びたまいかれば」（出エ3・4）

靈火の背後から、今度は、靈言、靈的な言葉が、神の言が現れる。

「我は汝の父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なり」（出エ3・6）

我が民はエジプトで悩み苦しんでいるが、それを助けてやろうと思つて、

「われ降りてかれらをエジプト人の手より救いだしそ々」

と。そして、カナン人の住んでいる所へ、約束の地へ連れて行こうといふ。

「エジプト人が彼らを苦しむるその暴虐を見た」

からなのだと。エジプトにいたときは大体300年位かかっている。ヤコブの後にヨセフが出て、これが非常な働きをした。神さまはモーセに、

「お前が行つて助ける」

と。モーセは、「私にはできません」と。有名な所です。

「神モーセにいたまいけるは我は有りて在る者なり」（出エ3・14）

これを、

「我は在りて在らしむる者なり」

と私は訳す。神さまが在るということは、人在らしめている。こつちが信ずると信じないとにかくわらず、我々は神の恵みで在らしめられている。太陽が在ることが、地球を在らしめていることと同じだ。私は太陽を見て、この言葉は実は、



「在りて在らしむる」

ということだというインスピレーションを受けたわけです。世界中にそういう訳をしているのが居ない。仕方がない、これは本当だから。そんなところは、いわゆる文法を超なければ。言葉にあまり執すると、実は神の根源語、神さまの根源の根源の気持が反ってそれなくなる。

これが、その火なんです。靈火です。靈火において現れた。それから、出エジプトする時、「斯てかれらスコテより進みて曠野の端なるエタムに幕張す。エホバかれらの前に往きたまい、昼は雲の柱をもてかれらを導き夜は火の柱をもて彼らを照らして昼夜往きすすましめたもう」（出エ13・20～21）よく、「天から火を降す」というような言い方が他のところにも出でますが、靈的な火の輝きが現れるわけです。

「民の前に昼は雲の柱を除きたまわす。夜は火の柱をのぞきたまわす」（出エ13・22）

とにかく、不思議なことだ。この「雲」もどうも普通の雲ではないようです。なにしろ、葦の海を渡るときに水が両方に分かれてしまう。あの「十誡」という映画にも出てくるようですね。自然の法則を乗り越えたところの靈の法則が、また力が働くわけです。

今度は、モーセが導かれて、モーセに何が与えられるかというと、例の「十誡」のことです。律法の一番もとになるところ。

「かくて二日の朝にいたりて雷と電および密雲山の上にあり。又歎咲の声

ありて甚だ高かり嘗にある民みな震う」（出エ19・16）

「ラッパの声」とは、別にラッパがあるわけじやない、これはいわゆるラッパじやないでしよう。

「モーセ嘗より民を引きいでて神に会しむ。民山の麓に立つにシナイ山都て煙を出せり。エホバ火の中にありてその上に下りたまえばなり。その煙竈の煙のごとく立ちのぼり、山すべて震う」（出エ19・17～18）

靈震が起きている。そういう現象の後で、神さまは十誡を下した。しかも板に、神が火をもつて、火の力をもつて文字を書いた。だから、律法も、靈火という現象の時に現れて与えられたので、律法自身が非常に靈的な力を持つたものだ。

●十誡

申命記の4章にやつぱり十誡のことが出でている。

「時にエホバ火の中より汝らに言いたまいしが、汝らは言詞の声を聞くのみにて声の外は何の像ほかをかたちも見ざりし。エホバすなわち其契約を汝らに述べて汝らに之を守れと命じたまえり。是すなわち十誡にしてエホバこれを二枚の石の



板に書したもう（申命記4・12～13）

「十誠」とは言わないんです。ヘブライ語では「十誠」でなく「十言」という。「アセレス・ハツ・デバーリーム」というヘブライ語です。「十言」、十の言葉。「戒め」ではない。

「汝、我面の前に我の外何物をも神とすべからず」（出エ20・3）

原文は、本当は「すべからず」という戒めではない。

「汝にとつては、我が顔の前には、私の外には神はない」

「私の顔の前には神がないが、私の顔の前でなければ、神々はあるんだよ」ということなんです。他の民族には他の民族の神々がある。それは認めないんじゃない。

「私の顔の前には、お前にとつては私だけが神だ」と、こういう言葉ですから。「すべからず」じゃないんです。

「他にはないぞ、お前とは一対一の関係で、イスラエルの神は私だ。他の民族にはそれぞれ神々があるだろうが、そんなことはお前には関係ない」

と。「拝一神」である。唯だ一人の神。人格関係とはそういうものです。「一対一」の関係なんだ。世界観的に他に神がない、と言つてはいるんじゃない。ところが、預言者になると、それを否定してはいけない。結構でござりますと。ただ、

「もう他には神はない、本来はエホバだけが神だ」と。「イスラエルにとつてはヤーヴェーだけが神だ」と。「すべからず」じゃない。

「私だけが神だよ」

と言つてはいるだけのはなし。だから、十の「言」なので、「誠め」じゃない。

「汝^{おのれ}」のために何の偶像をも彫^{きざ}むべからず」（出エ20・4）

「彫^{きざ}まないねえ。私が神であつて、偶像なんかになりはしないぞ」と。

「汝の神エホバの名を^{みだ}妄^{みだ}りに口にあぐべからず」（出エ20・7）

「口にあげない」ということ。

「安息日を憶えてこれを聖潔すべし」（出エ20・8）

ここ^の所は、ちょっと命令になつていますけれども。それから、

「汝の父母を敬え」（出エ20・12）

「敬^{きよ}うことだ」という言い方になつて、ちょっと名詞的な言い方になつていてる。

「汝殺すなかれ」（出エ20・13）

「汝は殺人しない。私がお前の神だから、お前は殺人なんかしない」

という、相手を信じて^{いる}言葉なんです。「ロー」というヘブライ語は、何々「しない」と



いう否定なんで、「アル」と言つたならば、何々「してはいけない」という禁令になる。この十言はみんな「口」が使つてあるので、「アル」でない。「口」が使つてある限りは、これは断定してものを言つている。

「お前は殺人しない。

お前は姦淫しない。

お前は盜まない。

という、本当の信愛関係なんです。

戒めで、「すべし、すべからず」だつたら、それは「おきて」になる。だから、「モーセの律法」なんて言つたって、それは或る意味においては、律法的な指図的なものは派生はしているでしよう、人間はダメだから。けれども、本来は、相手を信じかかつてものを言つてはいる、信愛している言葉なんだ。世界中、この信愛ということが本ものになれば、平和に必ずならざるを得ない、ということだ。

イスラエルの神とイスラエルの民の関係は、信愛関係で、実は律法ではなかつた。それを律法としてしまつては、「トーラー」という律法にしてしまつては、本当は、歴史的に神の本義をとりそくなつてはいる。そういうことを言う学者がいるか、いないか知らんよ、私は。

キリストは、はつきりそれをとつた。だから、いわゆる律法よりも、キリストの言葉の方がはるかに上なんです。山上の大告白はモーセの十誡以上です。まあ、大変な人なんだ。だから、キリストは十字架に懸けられるのは、もう当然なんです。

「そんな次元じやないぞ」

というのがキリストの世界だから。キリストを瞑想していると、もう言葉がなくなる。説明がいやになる。私の『無の神学』がキリスト教界で受けとられないのは当然なんです。この世界に入らなければ分かりはしない。「無」と言うと、虚無だと思つてはいる。冗談じやない。ニヒリズムじやない。

●火の如き福音

これ(十誡)は信愛関係の「隠れたる福音」なんです。いわゆる律法じやない。「顯なる福音」

は今度はキリストがなきつた。律法を完全にもつと強い次元でもつて満たして、いわゆる律法の世界を要らなくしたのが、イエス・キリストの福音なんです。しかし、この福音がものすごいものだから、そのキリストの言葉を一生懸命で守ろうとすると、またキリストの言葉を律法にしているから、いつまでたつてもダメです。

キリストの言葉を生きるためには、キリストそれ自身に、イエスそれ自身の中に自分を投げ込むまでは、受けとれない。祈りとは、本当に自分を投げ込むこと、キリストの懷の



中に入ることです。キリストの懷に入つてから、個々の祈りをしなさい。本当の祈りはキリストの中に祈り入ること、祈入すること。よく「己を捨てろ」なんて言うね。どこへ捨てるのか。

「キリストの中へ自分を捨てたらしい。投身するんだ」と。我々の福音は火の如き福音なんです。

「この火燃えたらんには」と。モーセのいわゆる十誡、十言も、火がシナイ山に燃えているその現実においてあつた。

申命記に、

「汝の神エホバは焼き尽くす火、嫉妬神なり」（申命記4・24）

「焼き尽くす火」と書いてある。我執という罪を、生まれつきの我を焼いてしまう。焼き殺してしまう。そういう言い方は躊躇のような言い方であまりよくないけれども。「妬む」とはサタンに対しての妬みです、悪霊に対しての。

「悪霊にとつ捕まつては大変だ」

と、神さまは私たちの一人一人の魂をサタンから奪い返す。その気持を持った愛なんです。その気持をもつた愛が即ち「妬み」という。「ジエラシー」というこの言葉は嫌な言葉だけれども、ものすごい熱愛を「嫉妬」^{ねたみ}という言い方で言つてはいる。「キヌア」^{ヌア}という言葉です。いわゆる

「妬みはダメだ」

ということはもちろんパウロが言つてます。いわゆる嫉妬の気持、そして争いは——女の人は妬む気持がとくにある、男は争う気持がある——

「妬み争いはけしからん」

とパウロが言つてはいるとおり。ここはそういう妬みではない。

仏教の方は、感情の世界を殺して、澄んでしまうなどころがあるけれども、福音の世界は非常に情熱が強い。その情熱は地的な情熱でなくて、天的な情熱である天來の火です。私は藤井武先生がこんな文章を書いているのを忘れていた。見つけてびっくりした。

「かつては私に真理に対する渴きがあった。自然に対する渴きがあった。家庭に対する渴きがあった。聖き事業に対する渴きがあった。しかしながら今、私はしばしこれらのものを忘れる。今、私の魂の渴き求めるものはただ一つである。然り、ただ一つである。神である。活ける神である。活きて私と相抱き得るもの、その懷の中に私の飛び込み得るもの、私の痛みを説明なしに悉く解し得るもの、大なる暖かき手をもつて私の手を堅く握り得るもの、信実に私と共に泣き得るもの、そして私の涙を拭い得る者。ああ、かくの如き人格者を私は今せつに渴き慕つのである。悩める魂の父なる神、愛なる活ける神、彼の顔を私は今、眼の当たり仰ぎ見たい。それでなければやりきれない。彼の言葉を私はいま鮮やかに聞きたくてたまらないのである。」



先生のこの文章がどこにあつたか、まだ調べていませんけれども、先生がこの時、なぜ「キリスト」と言わなかつたか、私は不思議でしようがない。キリストは、藤井先生のこの渴きを満たしてくださる方なんです。そこをただ「活ける神」と言つてはいるだけで、

「へえー、そうかなあ」

と思う。後でイエスのことを大分深くお書きになつてはいるけれども、要するに、藤井先生も聖靈のまだ手前だつた。先生の詩の中で、聖靈のことを書いている所は素晴らしい。けれども、それは思索の上で書いているので、本当の実感から告白しているのとは違う。

内村先生の直弟子たちはみな優れた人達ばかりです。ところが、結局、聖靈の世界に本当は誰も来なかつた。塚本先生は最後に

「自分は間違つていた」

とおつしやつた。先生方を人間的に尊敬することとこれは別問題です。私は人間的には尊敬しています。けれども、この福音の世界の、パウロの焦点となつてゐるところの、使徒たちの焦点となつてゐるこの聖靈の世界は、御靈なるキリスト、キリストなる御靈——それは十字架が土台ですよ——こればつかりはしようがない。

だから、ルカ伝12章のこのキリストの言はすごい。

「火を地に投ぜんために来た」

しかも、その火はいきなりやるわけにいかないで、

「受くべきバプテスマがあつて、思い迫ることいかばかりぞや」

という。十字架のことです。

「十字架はどうしても自分が受けなければならぬバプテスマなんだ。そうしたら聖靈を与えるから、祈つて待つていろ」

これがペントコステになる。ルカ伝の12章の49節、50節は要するに「聖靈と十字架」を語つてゐる。「受くべきバプテスマ」とは、十字架のことですから。キリストだけが受け得るバプテスマで、我々はダメなんだ。贖罪のバプテスマだからね。

左手にコーランを持つて右手に剣を持つてゐるようなマホメット教とおよそ違うんだ、冗談じやないよ。本当に東西を融合することができた宇宙的なものは、このキリストの福音だけです。

藤井先生も非常に飢えていた。

「我を見し者は父を見しなり」

ということは、藤井先生だつてちゃんと知つてはいらつしやるんだ。本当にキリストに来るということは、中に自分を投げ入れるということは、聖靈の世界を、御靈のバプテスマ、受けけるまではできない。



●四位一体

「アロン民にむかいて手を挙げてこれを祝し、罪祭燔祭酬恩祭を獻ぐることを畢おえて下れり。モーセとアロン集会の幕屋にいり出いできたりて民を祝福せり。斯てエホバの榮光すべての民に顯れ、火エホバの前より出て壇の上の燔祭と脂あぶらを焼きつくせり。民これを見て声をあげて俯伏ひれふしぬ」（レビ記9・22～24）

「集会の幕屋」というのは神さまとの「出会いの幕屋」です。住む幕屋と違う。これも靈火です。しかも、これは靈火でありながら、力を持っているから、焼けてしまった。

「火が来て焼いた」ということは士師記のギデオンのところに出てくる。

「エホバの使つかい手にもてる杖の末端を出して肉と無な醇いわいパンに触れたりしかば、嚴いかわより火燃えあがり肉と無醇パンを焼き尽せり。かくてエホバの使つかい去りてその目に見ずなりぬ。ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覺り、ギデオンいけるは、ああ神エホバよ、我かお面を合わせてエホバの使者を見たればた如何いかんせん。エホバ之にいいたまいけるは、心安かれ怖おそる勿なかれ汝死ぬることあらじ。ここにおいてギデオン彼かしこ所にエホバのために祭壇を築き之をエホバシャロムと名づけたり」（士師記6・21～24）

「火燃えあがり肉と無醇パンを焼き尽せり」

と、これでこの神さまは力のある本当の神だということをギデオンは覺る。神に出会つたら、こつちは死ぬというような氣持を持つていたから、「心配するな」と。

「心安かれ」という言い方は、キリストもペテロに言われました。

「平安、汝に在れ」（シャーローム・レカー）

という言い方です。「エホバシャロム」「平安の神」と名付けた。これは絶対に「平和」と訳してはダメです。私は封筒の上に必ず「平安」と書く。あなたに平安がありますようにと。平安のないところに平和なんかありはしない。それは偽りの平和だ。神さまとの関係がちゃんと立つていないところに、本当の平和はない。人間の関係がどんなに良きそうに見えても、いつ崩れるか分からん。ところが、神さまとの関係は崩れない。崩れたら、自分は滅びる。

「神——キリスト——聖靈——我」

の「四位一体」という。「四位一体」なんて普通の人は言わないんだ、「三位一体」とばつかり言つてる。三位一体だけでどうなりますか。「神・キリスト・聖靈」が三位一体で、我々はどうなるんですか。我々との関わりを持たない三位一体なんてどうにもならん。四位一体だ。三位一体ということを神学的に何のかのと議論しているのは、バカみたいなんだね。どうしてああいうバカな議論をしているかと思う。

「神さまは靈だ」

とキリストが言つてゐるじゃないですか。「靈」ということは「聖靈」ということです。神



さまの中には聖靈がある。自分の中にも聖靈がやつてきた。聖靈は神・キリストの媒介者です。この三つは離れることができない。それぞれ、「神・聖靈・我（キリスト）」であるけれども、これが完全に同質的になつていて、これを三位一体というので、どこが悪いんだ。大詩人ゲーテもそこが分からなくて困つた。その点はちょっとゲーテさんもダメだけれどもね。私の詩の中には、はつきり四位一体が出てくるから。

●キリストの十字架の碎け

しかも、これは立派な人間じやない。破れ器なんだ。破れ器だから、

「我は罪びとを招かんとてきた来れり」

とキリストは言われた。自分を「罪びと」としない者はキリストとは関係ないんだ。

何も、天野先生の悪口を言うわけじゃないけれども——天野先生は

「神は愛なり」

と書いた——天野先生は

「どうも僕は十字架が分からない」

と言うから、

「先生はあまり立派過ぎるから」

と言つてやつた。

「本当は小池君みたいな信仰を持ちたいんだけども、私のは哲学的信仰というんだ」

と。そのとおり。

「私みたいな奴は躊躇の人だから、

「もういい加減にしよう」

と出て行つたのがいるよ。私は一つも追わない。

「ああどうぞ出て行つてください。もつと立派な牧師さんのところへ行つてください。それで本当の福音がつかめたら」

と。冗談言うなと。手島さんや私は人間的には欠陥だらけな男だ。だけれども、そこに本当のものがやつて来ている。神さまは使つてくださる。

「我々の心は詩篇51篇のように碎けなくてはいかん」

と言つて、「本当に碎けるか」と言つんだよ。私は。人間の心が本当に碎けるならば、十字架は要らない。碎け切れない奴だから、だからキリストが十字架で碎かれた。イザヤ書53章です。この「碎け」を賜り、本当の破れを賜る。全部「賜る」んです。破れているのに、破れてないような顔をしているのは偽善者だ。

「わが名のためにお前は憎まれるぞ」

と、その通り。私は憎まれている。いいよ、それで。キリストは、神さまに本当に全的に



信頼したキリストが十字架上で何と叫んだですか、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄てたまひし」と言われた。

「神さまにまで私は棄てられたか。どこに行つたらしいのですか、あなたに棄てられたら」

「棄てられるはずのない私が十字架に棄てられるとは何事だ」というわけだ。あの言葉があるから凄いんです。キリストがあの叫びをしなかつたら本当じやない。

「棄てられるはずのない私が十字架に棄てられるとは何事だ」ということなんです。贖罪の十字架を否定しているような言葉なんです。完全に逆説的な言葉です。

「私をこうやつてお棄てになつたから、彼らを赦してやつてください」と。彼があとで

「彼らを赦したまえ」

というのは、

「棄てられている私だから、赦せる」と、こういうことなんです。全部、罪びとの首になつたんだ。

パウロは、

「我は罪びとの首なり

と言つた。内村鑑三も、

「私はしようがない野郎だから、私も罪びとの首だ。だから万人が救われるんだ」と、彼は戦場ヶ原で語つた。私は第三番目の罪びとの首だ。私が救われたから、あなた方は皆救われます。私は天国に最後に、天国の扉が閉まる一番後に私は入つて行きます。私の詩ではそういう告白をするかも知れない。

とにかく、人間はどうにもならないです、神に立ち帰るまでは、本当に平伏すまでは。しかし、平伏し切らないから、キリストは全部これを十字架で引き受けた。大変なもんです、キリストの十字架というのは。キリストは

「我みずから懸かるのである。自ら棄てるのである」と言つた。

「お前たちに形はとつ捕まえられても、本当はとつ捕まえられたのではない。イザヤ書53章を私は身をもつて証しするために十字架に懸かるんだ」

と。弟子たちはかなり従つていたけれども、とうとう終いには弟子たちも従えなかつた。マグダラのマリアだけだ、本当にキリストに従つたのは。七つの悪鬼を追い出された女です。ナルドの香油の壺を割つて全部これをキリストの頭に注いだ。あれは彼女の本当の全身的な献げの気持なんです。



「⁵¹われ地に平和を与えたために來ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。⁵²今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。⁵³父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分かれ争わん」（ルカ12・51～53）

「それでは、私たちは喧嘩するのがいいか」

と、そういうことじゃない。本当の真理を、生きた真理を、キリストを受けとると、どうしてもそれは生まれつきの自分たちには合わない。血はつながっていても、それは本当の親しみにならない。けれども、

「私を受けとれば、私を通じて神さまを受けとれば、本当の、血のつながり以上の間柄になるぞ」

と。これが、

「クリスチヤンは兄弟姉妹だ」

という、所以なんです。地上のいろんな関係はある。けれども、靈的な意味で全部兄弟姉妹だ。

●火の預言者

「エリヤこたえて五十人の長にいけるは、われもし神の人たらば、火天より降りて汝と汝の五十人とを焼き尽くすべしと。火すなわち天より降りて彼とその五十人とを焼き尽せり」（列王記略下1・10）

すごいね、これは審判だ。審判の火だ。何回もやつた。全く、神の人、火の人だ。エリヤは靈火人だ、靈火の人だ。アハジアが別の神さまを拝んでいるから、冗談じやないぞと。エリヤがアハジアに、

「エホバの神さまはこういう神さまだ」

と。アハジアは参つてしまふ。10節、12節、14節と三回やつていて。

そして、今度は、エリヤが天界に行くときはどうですか。

「彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらわれて一人を隔てたり。エリヤは大風にのりて天に昇れり」（列王記略下2・11）

火の車と火の馬がやつてきて、その戦車みたいなものに乗つかつて、天界の風が吹いてきて、どこかへ行つてしまつた。エリヤは死なないで見えなくなつた。

「いや、どこかへ落ちてるはずです」

とか言つて、探しに行つたところが、一向にみつかなかつたと書いてある。

「それなら搜してみろ」

とエリシャが言つたんだ。いくら搜しても見つからぬものだから、

「やっぱりエリヤは天界へ行つてしまつたんだなあ」

と、面白いことが書いてある。



私はバカだから、聖書をその通り私は読んでますから。皆さん、少しバカにならなければダメだよ。あんまり利口過ぎてしまつてね。今の子供は利口過ぎてしまつて、受験勉強で妙な利口になつてしまつてしようがない。もう学校なんかみな解散して、全部本当の塾にすればいいんだ、吉田松陰の塾みたいに。幼稚園から大学まで貫いていいるような本当の学校ができる、受験勉強は要らないということにならなくては。青少年が悪いんじゃない。教育者と政治家が悪いんです、そういうような構造にしてしまつているのが。

エリヤは火の預言者です。エリヤの弟子のエリシヤもすっかりエホバの靈を受けとつて、「エリシヤ祈りて願くはエホバかれの目を開きて見させたまえと言ければ、エホバその少者の眼を開きたまえり。彼すなわち見るに火の馬と火の車山に盈てエリシヤの四面に在り」（列王記略下6・17）

これは何かに囮まれた時、エリシヤは出かけて行つて、大軍を恐れることはないと言つて、やつたところだ。同じようなことが書いてある。

●愛の炎

それから、ちょっと種類は違いますけれども、愛がいかに火のようなものであるかといふことが雅歌書に書いてある。

「⁶われを汝の心におきて印のおしでごとくし、なんじの腕におきて印のおしでごとくせよ。其は愛は強くして死のごとく、嫉妬は堅くして陰府よみにひとし。その焰ほのほは火のごとし。いともはげしき焰なり。⁷愛は大水も消すことあたわず。洪水も溺なあらすことあたわず。人その家の一切の物をことごとく与えて愛に換かえんとするとも尚なおいやしめらるべし」（雅歌8・6～7）

これはシユラミの女と牧者との深い恋愛の詩です。結婚するんでしょうけど。

「汝の心におきて印おしでとなし」

というのは、まるで入れ墨みたいにしろというわけだ。「愛」と「嫉妬」は同じ意味で使つてゐる。愛の炎は火の炎だ、消すこともできない。どんな宝もダイヤモンドもこの愛とは比較にならない。我々の愛はそういう愛だという。これが火だ。靈的な愛だ。正しい深い意味での恋愛の詩としては、雅歌書にかなうものはないですよ。ゲーテがこれを読んで驚いた。彼は雅歌書が好きで、自分で訳もしたくらいです。『ファウスト』の中にも出てきます。

「イスラエルの光は火のごとく、その聖者はほのおの如くならん」（イザヤ10・

17)

「聖者」とは神さまのことです。エホバの神さま。イザヤは神さまのことを「聖者」と言つてゐる。聖なる者。

「¹ヤコブよ、なんじを創造せるエホバいま如此かくいい給う。イスラエルよ、汝をつくるもの今かく言い給う。おそるるなけれ我なんじを贖えり。我なん



じの名をよべり。汝はわが有なり。²なんじ水中みずのなかをすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火ひのなか中をゆくとき焚やかることなく火焰ほのおもまた燃えつかじ」（イザヤ43・1～2）

「もう贖きよつてしまつた」

「どう。呼べば、贖う」じゃなくて、

「もう贖きよつてしまつたから。お前の名を呼んで、汝はわが有である」

と。「心頭滅却すれば火もなお涼し」という言葉があるが、心頭滅却じやなくて、もう身体に聖靈の火が満ちているものだから、火が熱くないというわけだ。クリスチヤンは本当はみ靈の火の人、靈火人なんです。

「火を投ぜんために来れり」

に対して

「その火は受けとりました」

と、キリストに我々はそう言えるわけです。

「⁷エホバよ、汝われを勧めたまいてわれ其勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑わらいとなり人皆我を嘲あざけりぬ。⁸われ語り呼わるごとに暴逆残虐しおたげの事をいう。エホバの言日々にわが身の恥辱はずかしめとなり嘲弄あざけりとなるなり。⁹是をもて我かさねてエホバの事を宣べず又その名をもてかたらじといえり。然どエホバのことば我心わがにありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるさざれことくなれば忍耐しのぶにつかれて堪たえ難し」（エレミヤ20・7～9）

「語らないで居ようとしたところが、神さまの聖言が火のよう自分骨の中で燃えるさざれことくなつて、とてもこれは、こらえるわけにいかないから、やつぱり言います。仕方がない、預言せざるを得ない」

と。だから、「預言者の思想」なんていう言葉があるが、「思想」じゃないです、預言者が言つているのは、預言者が考えてものを言つているんじやない。

「神さまに示されて神さまの言葉が入つてきて燃えるから、言わないではいられない」ということです。

私は日曜の話がそうだからね。しゃべつていてるうちに、上から力が来てしようがない。預言者や使徒たちが天界で嘆いているよ、今のキリスト教は一体何だと。

「パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、イザヤよ、エレミヤよ」と、友達のように言えるような境地に入らなければダメなんです。み靈の世界はそんなんだ。

●靈火人

ダニエル書の3章のところに、火の燃えている所に投げ込まれたけれども、燃えつかなかつたと書いてある。凄いね、ダニエルというのは。獅子も噛みつけない。



それから、聖靈の預言をしたところのヨエル書。2章の3節に書いてある。

「火彼らの前を焚き火炎かれらの後にもゆ」（ヨエル2・3）

それから、審判の火としては、アモス書1章にさんざん出でている。

「あらゆる国が神さまの審判にあつて、火で燃やされてしまう」

という。これは審判の火だ。

新約聖書の大事なところはマタイ伝の3章です。

「我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその靴をとるにも足らず、彼は聖靈と火にて汝らにバプテスマを施さん」（マタイ3・11）

洗礼のヨハネがキリストを指して、

「あのひとは聖靈と火でバプテスマを施す靈止だ」

と。「聖靈と火」ということは「聖靈の火」と同じことです。聖靈の火でもつて、火のような聖靈でバプテスマをする。それを地上ではなきらなかつた。これが今日の主題のルカ伝12章の49、50節なんです。

「受くべきバプテスマあり」

と。キリストのいうこのバプテスマは十字架ですから。

「十字架を受けて、贖罪が済んだら、そうしたら今度は火を、み靈の火を投ずる。だから祈つて待つていろ」

と。彼らは祈つて待つていたら、俄然、降りてきた。これがペンテコステの使徒行伝2章。そういうわけです。

「烈しき風の吹ききたる」とき響、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各々のうえに止まる。彼ら聖靈にて満され、御靈の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ」（使徒2・2～4）

「異邦の言」ではない、これは異言のことです。異言で語りだした。異邦の言葉も、知らない言葉もしゃべりましたよ、全部これは異言なんです。サンダーシングが英語を知らないで、英語を知っている人たちにしゃべろうと思ったら、英語が出てきた。これも高次な異言ですから。まあ大変な世界です、こういう次元になるとね。

「火」には審判で焼き尽くす火と、本当に人を救い上げる火と、二つある。聖靈の火は救い上げて活かす、新しい生命を与える火です。黙示録に出てくる火は審判の火が多いね。滅ぼされてしまう。我々は靈火人です。み靈の火の人。そうならざるを得ないです。キリストを本当に受けとれば、靈火人たらざるを得ないというはなしだ。

